光源氏の別れの歌

上野辰義

〔抄　録〕
平安時代のつくり物語において、和歌は当時の貴族生活における、日常語とは異なる美的言語による伝達手段、こころをのべる抒情の手段としてあり、その反映として、多くの和歌が物語の登場人物たちによって詠まれている。本稿では、源氏物語の光源氏による和歌詠出のさまと、物語での構成上の役割、表現効果について、六条御息所との間で交わされた生別・死別の歌を中心にして検討する。それらに、物語歌の機能と性格が端的に露呈していると考えるからである。

キーワード　源氏物語、光源氏、六条御息所、和歌、哀傷歌

一　愛する者との別れ

十九歳の釈尊、悉達太子は、心に深く出家すべきことを思い、太子の成長に心を砕き続ける父浄飯王にむかい、こう告げた。恩愛は必ず別離有り、唯し願わくは我が出家・学道を聴し給え、一切衆生の愛別離苦を皆解脱せしめんや、と（今昔物語集巻一第四話による）。太子は、自身の出城入山という別れによって生じるに違いない、恩愛限りない父王の悲嘆を思い、愛別離苦の解脱を口にしたのである。まことに愛別離苦こそは、生老病死の四苦に次いで人の世の苦しみであろう。人生は愛別離苦に満ちている。悉達太子のこの語を伝える今昔物語集に先立って成立した源氏物語においても、劈頭巻桐壺において早々に、光源氏の父桐壺帝と母桐壺更衣の死に別れの悲しみを語り、光源氏も多くの女性たちとの生き別れ死に別れを経た果てに、最愛の妻紫上喪失の慟哭を体験する。光源氏没後も、愛別離苦は物語の人びとに引き継がれ、薫は八宮の姫大君を喪い、喪ったと思われた浮舟の生存を知り、仲介に入らせた横川の僧都に、浮舟への消息文のなかで、薫のかかずらう「愛執の罪をはるかしきこえ給て」（夢浮橋二〇六五）[1]と言わせるに至る。光源氏が紫上を喪失して、その後一年以上にわたり、

悲嘆し続けたのも、紫上への愛執による。愛別離苦の基は愛執にあったのである。このように、愛執と一体化した愛別離苦は源氏物語の重要なモチーフの一つとしてある。

この、愛する者との生き別れ、死に別れによって生じる愛別離苦に遭遇するたびに、ほぼ光源氏はその思いを他者との贈答、あるいは独詠という形で歌に表出している。鈴木日出男氏は、「光源氏物語の末尾の歌」[2]において、一続きの話しがまとまろうとするところに、和歌が挿入されるという形は、物語の、ひいては語りの有力な一形式で、これを高度に方法化した作品『伊勢物語』においては、各章段末尾の和歌がそこに至るまでの物語の経緯を逆照射する方法によって、歌を詠まざるをえない人間の心を証したてながら、彼がどう生きたかを検証するのを基本としている、と言われた。そして、『伊勢物語』と同様に『源氏物語』においても、ある話のまとまりまとまりに、和歌が集中してあらわれており、それぞれの話しの経緯を逆照射する物語の固有の方法として、光源氏の人生と、鈴木氏のいわれる光源氏の〈いろごのみ〉の本性を証しているということを、夕顔巻末、朝顔巻末、真木柱巻末、幻巻の和歌群を取りあげることで論じられた。個々の歌群の意味等については検討の余地もあろうが、夕顔・空蟬との死別・生別から紫上喪失に至るまで、光源氏の人生において、女性たちとの別れに際して歌が詠まれ続け、その時の光源氏の思いがそれらのことばの奥底に潜められてきたことは、ほぼ間違いない。それは、勅撰和歌集をはじめとして、当時の和歌集に、哀傷・離別、また京に残してきた人を思う羈旅の歌があふれているように、平安貴族の文化的生活の一面の反映であり、また、物語の和歌を含め、平安朝の和歌が、社交と抒情の文芸・言語活動として、鈴木氏もいわれるように、他者への働きかけのなかに己が心情を封じこめるという、表現の二重性をかかえこんでいたからであろう。[3]

本稿では、そうした光源氏の別れの歌を、物語の展開と、歌の詠まれる場における、語りと人物のことば、との相互関係・共振のなかで分析し、そこに込められた物語の構成上の意味、光源氏らの別れに際しての心情を読み取って、その別れのもつ位置を定めてみたい。対象とするのは、光源氏と六条御息所との別れの歌どもである。六条御息所は、夕顔巻では夕顔と、葵・賢木巻では葵上と紫君と、薄雲巻では藤壺宮と、梅枝巻では筆跡比較、藤裏葉巻では再び葵上・紫上と、若菜下巻では葵上・明石御方・紫上と、それぞれ対比されて登場・言及されるという、光源氏や物語にとって今さらながら重要な人物であり、光源氏との離別・出家・死別を経るという点で、光源氏とって母につながる始原の女性である藤壺宮と対応する人生を送り、藤壺宮とともに、「つひに心もとけずむすぼほれてやみぬること、二つなむはべる」（薄雲六二六）うちの一人であったからである。

二　野宮訪問までの道

六条御息所は、夕顔巻頭で「六条わたりの御忍びありきのころ」と、詳細な素性が不明のまま、光源氏の通い所として突然登場してくる。これは、帚木巻頭部の「まだ中将などにものしたまひし時」と対比的

で、光源氏の側の事情によって意味づけされた、光源氏の一生のある時期のこととして提示された時代区分としてある。宣長の年立てで言えば、帚木巻から夕顔巻の物語は、光源氏十七歳の夏から秋・立冬の時までのものであるから、両者の時期区分は、光源氏の官位とこの時期の特徴的な女性関係とで提示されたもので、ほぼ同時期、特に後者において、相互干渉されるべきものとしてある。この「六条わたりの御忍びありき」は、「言ひ消たれたまふとが多かなる」光源氏の中将期の「末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむ、と忍びたまひける」「好きごとども」の代表的なものだったのである。

そのことは、夕顔巻で既に明らかだ。五条の夕顔の宿の女に遭遇した日の、外出の本来の目的であった六条辺のさまは、「御心ざしのところには、木立、前栽など、なべてのところに似ず、いとのどかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの、けしきことなるに、ありつる垣根思ほしいでらるべくもあらずかし」と語られ、その女の身分・教養・身のもてなしの格別であることが示されながら、「六条わたりにも、とけがたかりし御けしきを、おもむけきこえたまひて後、ひき返しなのめならむはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまでおぼししめたる（おほししれる―陽、おほしゝれる―河）御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝覚め寝覚め、おぼししをるる（おほしみたるゝ―陽河）こと、いとさまざまなり」とあって、賢木巻の言及によれば光源氏よりも七歳年上の女としての衰えと世評、強引に情を通じた後の光源氏の愛情の衰えを、極度に内向的に思い悩んでいた。そのことは光源氏も自覚しており、夕顔の宿の女と某院で一夜を過ごした際も、「六条わたりにもいかに思ひ乱れ（思し嘆き―陽）たまふらむ、恨みられむに苦しうことわりなり」と、自己の責任を認める一方、目の前の素直に光源氏になびいてくる五条の女と、「あまり心深く、見る人も苦しき御ありさま（御もてなし―陽）を、少しとり捨てばや」、と六条の女を思ひくらべていた。六条の女の極度の内向性（背景には出自と経歴による誇りがある）が、光源氏には重かったのである。ぞんざいに扱うことが許されない身分と人品でありながら、我ながら処置のほどこしようがないほどに、愛情がしぼんでいく六条の女を、将来にわたる妻の一人として、光源氏は世間に公表する自信がもてないまま、かといって、接近した当初以来魅せられている、女の持っていた教養と風流を思い捨てきれず、捨てては決定的に傷つく女の立場を恐らくは思いやって、女にとってはそれも苦しい途絶えとだえの中途半端な関係を清算できずに続けていた。この関係は夕顔の死後も、藤壺宮との密通、藤壺の懐妊、紫君の二条院引取りと養育などの影響をうけながらも、基本は継続していく。

だが、桐壺帝の退位による御代替わりを語った光源氏二十二歳の葵巻頭部で、「まことや、かの六条の御息所の御腹の前坊の姫君、斎宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいとたのもしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて、くだりやしなまし、とかねてよりおぼしけり」などと語られて以降、六条辺の女は六条の御息所と呼ばれて、大臣家の出であること、十六歳で前坊に入内し、十七歳

でその娘を出産し、二十歳で前坊に先立たれ、二十八歳で前坊の姫が斎宮に卜定され、三十歳で娘に随行して伊勢に下向することになる、などの経歴が明らかになる。この葵巻頭部で、「大将の御心ばへもいとたのもしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて、くだりやしなまし、とかねてよりおぼしけり」とあるのは、光源氏十八歳の冬に紫君を二条院に引取り、「かの紫のゆかり尋ねとりたまひて、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに、かれまさりたまふめれば」と、語られていたことと、無関係ではないだろう。二条院に光源氏と共に暮らす紫君の存在は葵上だけでなく、六条御息所にも否定的な影響を与えていた。

こうして、前皇太子の妃であったにもかかわらず、光源氏に押されて愛人となったものの、年上であること、高貴な身でありながら日蔭者であること、源氏の愛が一段と頼りないことなどを、常に思い悩んでいた六条御息所は、前坊との間の娘が伊勢の斎宮になったのを機に、自身も伊勢に下って源氏を思い捨てようとする。光源氏も、御息所の伊勢下向を最終的には引き留めようともしない。そうした揺れる心を慰めようと出かけた賀茂の祭りの御禊の日、後からやってきた光源氏の正妻葵上の一行に、人目を忍んだ外出を見破られて自身の光源氏への捨てきれぬ思いと境遇のみじめさを、世間周知の嫡妻として光源氏の子を宿して優位に立っている葵上方に見抜かれ、見物の場所を奪われて（所謂車争い）、自身の存在が否定された衝撃で自我が崩壊し、生霊となって葵上をとり殺した。生霊となった御息所の姿を自身の目で確認した光源氏は、男女の仲にある執念をうとましく思い、以後、文通はするが、逢うことは避けるようになる。そして、伊勢下向が近付く。六条御息所は、葵上死後、その後釜にという世間・周囲の予想と期待に反し、光源氏が却って御息所から遠ざかるので、生霊の件で完全に嫌われたと悟り、光源氏をはじめとするすべての情愛を振り捨てて、伊勢下向をいちずに決意し、居るに堪えない都を離れようと思うのであった[4]。教養あり風流を解す御息所の下向を、光源氏は、さすがに残念に思い、未練を籠めた手紙をたびたび送るが、二人とも対面は避けていた。特に御息所は、逢えば、自分の方が心乱すであろうと見通し、逢瀬を固く避けていた。

しかし光源氏は、対面しての挨拶もなく、御息所を伊勢に下向させることは、彼女から決定的に恨まれることになり、世間の噂も情に欠けるものとなるであろうと、発起して九月七日ごろ、十六日の下向に向けて準備にあわただしい、野宮を訪れる。つまり、光源氏の野宮訪問は、全く自分中心の理由からであった。御息所との対面は、車争いの後、葵上逝去の前に、場所を変えて病いの療養をしている御息所を見舞って以来、優に一年ぶりのことであったはずである。しかし、再会時、語り手は「月ごろの（日比の―阿、『別本集成』による）つもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりにければ」と語る。前年秋の葵上の逝去、冬の紫上との新枕後に、年明け、新年の挨拶の逢瀬などが存在したものの語られずにいたのであろうか。

ともあれ、通常の男女においては起りにくい数カ月にわたる対面の空白をおいて、光源氏は御息所との意思疎通の道を困難な状況の中で、是が非でも拓いていかねばならなかった。

三　離別―秋の情趣と歌の力

光源氏が野宮を訪問したのは、重陽の宴に先立つ「九月七日ばかり」。これは光源氏のみならず、十六日に伊勢下向となる御息所方にとっても、ぎりぎりの日取りであったろう。御息所方は潔斎のみならず下向の準備にあわただしいさなかだったが、十分留意してと光源氏に繰返し申し込まれたので、さあどんなものかと躊躇しながらも、あまりに閉鎖的すぎないよう、直対を避けて物越しでならと、「人知れず待」っていた。この時すでに、御息所は、光源氏を思う気持ちに負けている。光源氏の付け入る隙があったのだ。

光源氏は、牛車で京を出たかもしれないが、晩秋の風情溢れる野に入っても、「ことにひきつくろひたまへる御用意、いとめでたく見えたまへば」とあるので、馬を用いた可能性もある。その方が、人目について、野宮訪問の対世間的な動機からすれば好都合だったろう。光源氏も供人たちも、盛りを過ぎた秋の花、衰え弱る虫の音、松風に交じって途切れとぎれに聞こえてくる琴の音に、「いと艶な」る自然と人事の優美な交響を感じとり、その官能美に浸される。光源氏は、この野辺にも凌ぎがたい炎熱の夏があったはずなのに、目下の秋の情趣につつまれて、「などて今までたちならざりつらむ、と過ぎぬるかた悔しうおぼさ」れて、これまで、野宮訪問を常としてこなかったことを、悔いる。これから、御息所と対面する光源氏の心にも、こうして、ここ数カ月、もしくは一年の欠礼に対する自責の念を抱え込んで、もの柔らかに御息所と対応する態度が形成されていったのである。夕闇につつまれ始めた野宮に着いてみると、火焼き屋の火がかすかに光って、人影も少なくしんみりとして、このような場所で御息所が光源氏との物思いを抱えこんで、光源氏の来訪もなく、幾月日を過ごしてきたであろうことを想像すると、光源氏の心も、「いといみじうあはれに心苦」くなるのであった。光源氏の心には一段と、後悔の念と、御息所への同情、彼女に寄り添う思いが形成されていくのである。光源氏の、女に対面するときの、望ましいいつもの「真心」と優しい態度が、こうして形成されていった。

女と男には、幾月もの逢瀬のなさによる緊張とぎこちなさを越えて、再会の保障のない伊勢下向の離別に際しての、最後の対面を迎える心の寄り合いが、こうして準備されていた。

御息所ははじめは人を介して応対していた。この間、どのような消息が二人の間を行き来していたのか。訪問の挨拶とそれに対する感謝・多忙斎戒を理由とした対面拒否、わざわざの来訪に報いてこちらの話を聞いてほしい、などの押し問答であっただろう。が、度重なる光源氏の催促と侍女のすすめとにより、御息所は廂に出てくる。光源氏も簀子に上った。そしてこの時、数カ月から一年に及ぶ直接対面の空白の重い扉を押し開いたのは、光源氏が手にしていた榊の一枝であった。この榊、京を発つ時に準備したか、あるいは野宮に到着後折らせたものか、いずれにしても光源氏が事前に十分計算して所持し、廂に差し入れたものなのである。神域にゆかりの榊をめぐる歌ことばの世界に入り込むことで、現実の二人が置かれた重苦しい愛の閉塞状況を乗り越えようとした。

月ごろのつもりを、つきづきしう聞こえたまはむも、まばゆきほどになりにければ、榊をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、「変はらぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」と、聞こえたまへば、

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ

と聞こえたまへば、

少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

光源氏の切り出しのことば、榊の変わらぬ色のように、変わらぬ私の心に道案内をさせて、あなたに逢いたいがために野宮の神の斎垣もこえてまいりました、は、二つの引歌によっている。

ちはやぶる神垣山のさか木葉は時雨に色も変はらざりけり

（後撰和歌集冬　題しらず　よみ人しらず）

ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに

（伊勢物語第七十一段）

女からの詠歌も、この引歌がらみのことばの投げかけにより、抵抗なく滑らかになされた。女も現実の状況を踏まえた会話のことばでは、対応しにくいのである。歌ことばにより半ば仮構された世界に遊んでことばを応酬する中に、自分の思いをしのびこませていくのである。男の用いた「しるべ」をずらして、野宮の神垣には目印の杉もありませんのに、どう間違えて榊を折られたのでしょう、と応じ、光源氏の来訪をやり込めた。ここの引歌。

わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てるかど

（古今和歌集雑下　題しらず　よみ人しらず）

これに対し、光源氏も、

少女子が袖ふる山の瑞垣の久しき世より思ひそめてき

（拾遺和歌集雑恋　題しらず　柿本人麿）

さか木葉の香をかぐはしみ尋め来れば八十氏人ぞまとゐせりける

（拾遺和歌集神楽歌）

を踏まえて、年若い女性に斎宮から御息所を含ませつつ、女を以前から思い続けている意と、榊葉の香を「かぐはしみ」を「なつかしみ」に替えて、御息所が慕わしいのでわざわざ訪れてきた、の意を表した。持参した榊を媒介に歌ことばの世界に入ることで、現実に即応した会話のことばでは、偽善の匂いが一段とたちこめるであろうような、来訪の挨拶と意図、御息所への「思い」を、仮構的に伝えることができたのである。鈴木日出男氏が「非日常的な歌の言葉を媒介させないかぎり、二人の意思の疎通は容易でなかったのであろう」[5]と言われるとおりだろう。

ちなみに、野宮の神域に男性が立ち入るのは支障なかった。

殿上の若君達などうちつれて、とかくたちわづらふなる庭のたたずまひも、げに艶なるかたに、うけばりたるありさまなり。

（賢木三三七）

簀子に上って、「御簾ばかりはひき着て、長押におしかかりてゐ」ることが、接近の限界だったのだろう。

こうして、歌ことばを媒介として実現したひとまずの心の交流により、二人の実際の心情も変化していく。光源氏は、生霊事件以来、御

息所に対して、愛情も醒め、仲も隔たっていたが、数か月乃至一年ぶりの対面が、二人が出会った当初の新鮮な気持ちを思い出させ、光源氏を惹きつけた御息所の本来の魅力を再認識させたのである。その結果、「あはれとおぼし乱るること限りなし。来しかたゆく先おぼし続けられて、心弱く泣きたまひぬ」と語られるほどになる。光源氏への思いを燃やし続けていた御息所の方も、事前の予想どおり、対面したがために一段と心を乱す。このような状態になった二人が、暁の別れまで、どのようなことばを交わしつづけたのか、「思ほし残すことなき御なからひに、聞こえかはしたまふことども、まねびやらむかたなし」と語り手が告げる以上に、現代の男には想像もつかない。伊勢下向にまつわる押し引きを軸に展開されたのだろう。

榊にまつわる贈答は、長の無沙汰を経て対面する挨拶の歌であったが、次のこの場を辞する暁の贈答は、後朝の別れの形を採りつつ、伊勢下向に関しての、対面時における離別の贈答にもなっている。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作りいでたらむやうなり。

暁の別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな

光源氏の贈歌は「暁の別れはいつも露けき」ということで、御息所との別れのみならず、他の女との後朝の別れをも含みこんでしまうというミスを犯しているが、「こは」とは眼前の「ことさらに作りいで」たような、秋のあわれを凝縮した空であり、御息所との久々の「逢瀬」の別れであり、一夜ずっと「なほおぼしとまるべきさまにぞ聞こえたまふめる。…。やうやう今はと思ひはなれたまへるに、さればよ、となかなか心動きておぼし乱る」と語り合っていたように、二人が京と伊勢に離れ行く別れなのである。女の返歌は、さらに眼前の、折知り顔の「松虫の鳴きからしたる声」以上に、次にいつ再会できるかもわからない伊勢下向を見据えて、「わりなき御心まどひ」に陥っている二人ゆえ、詠出に手間どった。

おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音なそへそ野辺の松虫

季秋の「おほかたの秋の別れ」に、「秋」と「飽き」を懸け、光源氏が贈歌でミスを犯した他の女性との飽き果てられた後朝一般をも含みこんで、今回の別れを相対化し、「松」と「待つ」を懸けて松虫の声におのれの光源氏への恨みを籠めた。この歌を受けて光源氏が、「悔しきこと多かれど、かひなければ」と、これまでのことを後悔しつつ去っていくのは、このゆえなのである。「道のほどいと露けし」。後悔もひとしおではなかったようだ。京に戻ってからの「御文、常よりもこまやかなるは」とあるのも、こうした今回の対面によりもたらされた効果の総体の反映であり、この手紙を見て「おぼしなびくばかりなれど、またうちかへし定めかねたまふべきことならねば、いとかひなし」とあるのは、今回の逢瀬が、二人にとって伊勢下向を意識した生別れを惜しむ性格を持っていたことを示している。

こうして、光源氏は御息所の伊勢下向を、以前から積極的に引きとめずとも残念に思ってはいたが、今回の野宮訪問により、語り手から「かくてそむきたまひなむとするを、口惜しうもいとほしうもおぼし悩むべし」と推量されるまでに、女に振り去られる男の苦しみと悔いを味わうこととなる。これに対し、御息所も、生霊事件以来すっかり

冷えていた光源氏の自分への思いが、今回の来訪では、昔のときめきを感じさせるまで持ち直して、伊勢下向を引き留め、ことばを尽くしたことに慰められたが、であるから一層、多くの女性と関わる光源氏の本性が思われて、その後贈られてきた「旅の御装束より始め、人々のまで、なにくれの御調度など」の豪華な餞別にも、「なにともおぼされず。あはあはしう心憂き名をのみ流して、あさましき身のありさまを、今始めたらむやうに、ほど近くなるままに、起き臥し嘆き」つづける。野宮の対面により、光源氏への思いと恨みを一段と深めるのである。

十六日の伊勢下向当日、出立の時分、あわただしくなされた光源氏と斎宮の歌の贈答は、同時になされた光源氏と御息所の贈答を背後に忍ばせて、斎宮である娘の位相で、母と男の関係をあぶりだしたものである。

「かけまくもかしこき御前に」とて、木綿につけて、「鳴る神だにこそ、

八洲もる国つ御神も心あらば飽かぬ別れのなかをことわれ

思うたまふるに、飽かぬここちしはべるかな」とあり。

（賢木三三九）

「鳴る神だにこそ」は、「あまのはら踏みとどろかし鳴る神も思ふ仲をば裂くるものかは」（古今和歌集恋四　題しらず　よみ人しらず）を引いて、娘の斎宮が御息所を伊勢に伴って、私との仲を裂いてよいものでしょうか、と暗に恨み、地祇である斎宮が、思いやりの心で、満たされぬまま別れを迎える自分と御息所の仲が正当ななりゆきであるかどうか裁定してくれ、というもの。文面で、この別れが納得できないと重ねていう。女別当の代筆した返歌は、

国つ神空にことわる仲ならばなほざりごとをまづやたださむ

（賢木三三九）

「心あらば」に対して「空に」と受けた。地祇がそのまま素直に判定する仲ならば、源氏の君のいい加減なお言葉となさりようをまずお糾しになるでしょう、と、光源氏の非を責めて切り返した。光源氏と御息所のこの時の贈答歌自体は、この斎宮と光源氏との贈答歌の趣旨と繋がりつつ、底に隠れている。娘は母が直に言えないことを、光源氏に伝えた。

この日、夕刻に斎宮の一行とともに、大内裏に入った御息所は、父大臣が娘の将来を夢見て大事に育てた果てが、今の「末の世」の自分と観じて、詠歌する。

そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞ悲しき

（賢木三四〇）

「末の世」、家運の衰えた晩年という認識で、自己の人生を振り返った独詠。ここに直接光源氏は顔を出さないが、前坊薨去後の今に至る没落は、光源氏とともにあった。光源氏とのかかわりの総括でもあるのである。

夜に入って八省院を出た斎宮の一行が、光源氏の二条院の前を洞院の大路へと南下する際、光源氏は野宮訪問時の榊を再び採用して、それに挿して歌を贈った。

ふり捨てて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや

（賢木三四〇）

私を振り捨てて伊勢に赴いても、私を思って後悔されるのではないでしょうか、と。男は野宮訪問以来の思いを、御息所の心にも投影して投げかけた。翌日、逢坂の関の向こうから届いた女の返歌。

鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ

（賢木三四一）

あなたを思って後悔するかしないか、誰が伊勢まで私のことを思いやってくださるでしょう。道中のことゆえ、簡略に書いた筆跡が状況に相応しく、よしある御息所として魅力的であったが、なおさらしみじみとした趣きが幾分加わっていたら、と光源氏は思う。簡略な文面と筆跡に、そっけないものを光源氏は感じとったのであろう。御息所は、自己の人生の涯を、没落の境涯と、男の愛情の頼りなさに見て、「伊勢まで誰か思ひおこせむ」と男への不信を表出しているが、それは同時に裏で男に甘えてもいる。本当は「思ひおこ」してほしい、と。そうした屈折した後ろ向きの思いで、御息所はいる。これを受けて、大粒の霧がひどく立ち込めた朝ぼらけに、あれこれ思い沈んでなされた光源氏の独詠。

行くかたをながめもやらむこの秋はあふさか山を霧な隔てそ

（賢木三四一）

「伊勢まで誰か思ひおこせむ」という御息所の思いに、この歌で応じつつ、将来の再会を思うが、それも「この秋」に限定されているところが、女が知ったら恨めしく思うのではないか。ただこの時は、光源氏はこの状況も自分が招いたことと、「人やりならず、ものさびしげになが め暮らし」て、去った女を思っている。語り手は、都に残った男がこうなのだから、「まして旅の空は、いかに御心づくしなること多かりけむ」と、去っていった女が男以上の思いでいることを語るのを忘れない。

このように、野宮の段から伊勢下向に至る、御息所との生き別れに関わる部分の展開を歌の配置で見ると、野宮訪問時の挨拶としての光源氏と御息所との贈答歌、野宮の別れ時における光源氏と御息所との贈答歌、下向当日における挨拶としての光源氏と斎宮（母娘の代表）との贈答歌、これに次ぐ御息所による人生の涯の認識に関わる独詠歌、伊勢下向途中時の光源氏と御息所との離別の贈答歌、これに次ぐ別れた女を思う光源氏の独詠歌、それから推量される女の懊悩と、構造的に仕組まれていて、生霊事件以後、閉塞していた両者の関係と思いが、伊勢下向に向けて変化、あるいは深化していく諸相を、これによって、跡づけることができる。和歌が物語展開と詠者の交流と個別的心理の表出に、大きな役割を果たしていることが、改めて確認できる。都と伊勢に離れ去った光源氏と六条御息所の心的距離は遠い。この齟齬が、その後の御息所の死霊化の一因となるのだろう。[6]

四　伊勢から明石へ

六条御息所の伊勢滞在時における光源氏との交渉は、光源氏が須磨へ退居した年の長雨の頃、京の紫上、藤壺宮、朧月夜、息子夕霧関係の人々との文通のさまが語られた後、花散里姉妹との文通のさまが語

られるに先立って、「まことや、騒がしかりしほどのまぎれに漏らしてけり」と、語り手に思い出されて語られる。伊勢に赴いて三年後のことである。伊勢の御息所との交渉は、「かの伊勢の宮へも御使ひありけり。かれよりも、ふりはへたづね参れり」とあることから、これに先んじて語られる京の人々との文通が、光源氏からの往信とその歌で原則示されるのと同様に、光源氏の方から伊勢に送った手紙のやり取りもあったと判断されるが、ここでは、「かれよりも、ふりはへたづね参れ」る、伊勢から須磨の光源氏のもとへわざわざ送られてきた例を語る。

「なほうつつとは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなむ。さりとも、年月隔てたまはじ、と思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかになりはつべきにか。」と多かり。

伊勢島や潮干の潟にあさりても言ふかひなきはわが身なりけり

うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれ藻塩たるてふ須磨の浦にて

ものをあはれとおぼしけるままに、うちおきうちおき書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりをまき続けて、墨つきなど見どころあり。（須磨四一八）

この消息は、都の人々との交渉と異なる点が三つある。一つは女からの消息であること、まず光源氏から伊勢へ一度は消息が送られた後、別の機に女の方から須磨へ送られた、ということだが、女の方に抑えられない思いがあったことを意味する。[7] 二つ目は、文面が長文で、その消息部分も他の場合と異なり長く紹介されていること、この部分は、歌でカバーしにくかったことを意味する。三つ目は、詠歌が二首複数示されていること。独詠的なものと贈歌的なものである。つまり、詠歌では具体を述べられない「言ふかひなきはわが身なりけり」の内実は、光源氏はほどなく都にも帰るであろうが、仏の教えから遠ざかっている自分御息所はそれがいつになるかもわからず、都での光源氏との再会も不定だ、思い悩み続けている光源氏との関係も含めた自分の境涯はどうなる運命なのか、というものだが、その悩みが、押え切れず、須磨の光源氏にぶつけて共鳴を求めてきたということだ。その意思が、贈歌「うきめ刈る…」に示されている。都と光源氏から遠く離れた伊勢で一段と孤立して、自分の境涯への物思いが深まったということだろう。

これを受け取った光源氏も、生霊の件で対応を誤ったために、御息所も悲観して伊勢に去っていったと考えているので、いまだに御息所を気の毒に申し訳なく思っており、自分と同じく、都を去っている御息所からの手紙に共感して、伊勢からの文使いを歓待し、返事も御息所に寄り添うものとなっている。

御返り、書きたまふことのは、思ひやるべし。「かく世を離るべき身、と思ひたまへましかば、同じくは慕ひきこえましものを」などなむ。つれづれと心細きままに、

「伊勢人の波の上漕ぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを

海人がつむ嘆きの中にしほたれていつまで須磨の浦にながめむ

聞こえさせむことの、いつともはべらぬこそ、つきせぬここちしはべれ」などぞありける。（須磨四一九）

「伊勢人の…」歌は、御息所の「うきめ刈る…」歌を受けて、消息文の「同じくは慕ひきこえましものを」を詠み込んだもの。都を東西に離れ去っている者同士のわび住まいに連帯を表明している。「海人がつむ…」歌は、御息所の帰京を思う文面と、独詠的贈歌に応じて、自身の境涯を詠嘆したが、これは、実は、光源氏が都の尼となった藤壺に贈っていた歌「松島のあまの苫屋もいかならむ須磨の浦人しほたるるころ」と、藤壺からのその返歌「しほたるることをやくにて松島に年ふるあまも嘆きをぞつむ」を踏まえている。光源氏は、都での再会を幻視する御息所への返事に、自身は藤壺との再会への望みを含ませたのである。ここに、生霊事件以来の負い目と現在の境遇の共通性から、伊勢の御息所に寄り添いながら、心の奥底では一体化しえない光源氏の真実がうかがえる。

こうして、須磨退居時代、光源氏は野宮訪問以来の御息所への自責と、二人の出会い当初を思い出しての後悔、都を去っている者同士の共感を、御息所に対して抱いているが、光源氏を惹きつけていた女としての御息所の魅力自体は、次第に、娘の斎宮秋好むと、明石の御方に移行して、御息所自身の内実は光源氏にとって一層空虚なものとなっていく。娘斎宮に対する、光源氏の関心の進展はいうまでもないだろう。伊勢下向当日の斎宮からの返歌を見て、光源氏は、

宮の御返りのおとなおとなしきを、ほほ笑みて見ゐたまへり。御年のほどよりはをかしうもおはすべきかな、とただならず。かうやうに、例にたがへるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりし、いはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ、世の中さだめなければ、対面するやうもありなむかし、などおぼす。（賢木三三九）

と、ただならぬ関心を抱いていたが、御代がわりで帰京した御息所に光源氏は情をつくすが、再会が実現しない中、「斎宮をぞ、いかにねびなりたまひぬらむ、とゆかしう思」っていた。斎宮への関心は、母御息所の遺言で行動を制止させられるが、斎宮の冷泉帝への入内後も思いはほのめかされていた。

御息所の魅力の明石御方への移行というのは、須磨から明石へ移動した光源氏が、父明石の入道の意向を受けいれて、明石御方と初めて結ばれた時の語りに明らかだ。

睦言を語りあはせむ人もがな憂き世の夢もなかばさむやと
明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ
ほのかなるけはひ、伊勢の御息所にいとようおぼえたり。（明石四六五）

光源氏に応じる明石御方の物を隔ててうかがえる様子が、御息所によく似ていたという。御方は、これまで筆跡なども「やむごとなき人にいたうおとるまじう上衆めき」、光源氏が「京のことおぼえて、をかしと見」るほどであり、光源氏への対応も「なかなかやむごとなききはの人よりもいたう思ひあがりて、ねたげにもてなし」ていたが、当

日も光源氏の口説きに、「もの嘆かしうて、うちとけぬ心ざまを、こよなうも人めきたるかな」と、光源氏は思い、実際逢ってみると「人ざまいとあてにそびえて、心恥づかしきけはひぞし」ていた。そうした教養・人品の様子も、御息所に通じていたのである。さらにいえば、御方の返歌中の「明けぬ夜にやがてまどへる心」の語句は、御息所が伊勢から須磨の光源氏に送ってきた前掲の消息文中の、「明けぬ夜の心まどひかとなむ」と呼応している。[8] 御息所と御方の物思いの深さが共通しているということだろう。光源氏は明石御方の返歌を聞いて、この御息所との呼応に気づいていたかもしれない。しかも源氏物語新釈はこの返歌の引歌に、「いとみそかに逢」った伊勢の「斎宮なりける人」への業平の返歌「かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは世人さだめよ」（古今集恋三）を指摘している。伊勢とのつながりがうかがえるし、同様のことは、御方との結婚以前の物語の語り中にも存在する。明石に移動した光源氏の弾く琴に感動して参上した明石の入道が琵琶を弾くところに、

今の世に聞こえぬ筋弾きつけて、手づかひいといたう唐めき、ゆの音深うすましたり。伊勢の海ならねど、「きよき渚に貝や拾はむ」など、声よき人にうたはせて、われもときどき拍子取りて、声うちそへたまふを、（明石四五五）

と、明石ながら、催馬楽「伊勢の海」を引用しているし、また、光源氏が明石御方に初めて文を送ったその使いに、父入道が「なべてならぬ玉裳などかづけたり」とあるところには、人丸集の「伊勢の国にみゆきする時に京にとどめられてよめる　みを（おふ）の海にふなのりすらんつまどもに玉藻の裾に塩みちぬらん（かも）」を指摘することができる。語り手は、光源氏と明石御方の対面まで、明石ながら伊勢を想起させる語りを用いていたのである。[9]

こうして、光源氏が都に戻り、御代替わりで御息所が帰京したころには、光源氏の心の奥底に残っていた御息所の肯定的な魅力自体も、娘前斎宮や明石御方に移行し、御息所自身は風流・趣味面での慰め相手程度の存在となり、女としての求心力をかなりの部分失いつつあったのである。

五　哀傷―御息所の遺言

御息所は、御代がわりによる斎宮退下にともなって帰京した後、変わらぬ思い遣りと気配りを見せる光源氏に、幾分若かった昔でさえつれなかった光源氏の愛の燃え残りを今さら見ても、これからの果ての姿に苦しむだけ、と会おうとしない。光源氏も無理して御息所を引き寄せても、その先自分の心ながらなりゆきを保障できないと思い、行動を慎んでいるうちに、御息所は急に重病に陥り、伊勢で仏道から離れていたことも悔やまれて、尼になった。見舞いに訪れた光源氏が、いつまでも誠意を示しつづけたいのにと思い、たいそう泣くのを見て、御息所は、「女もよろづにあはれにおぼして、斎宮の御ことをぞ聞こえたまふ」のだが、ここで、出家して尼になった御息所が、「女」と呼ばれていることが注意される。愛執を離れるべき仏弟子となったにもかかわらず、男女の恋の場で用いられる当事者としての語で、御息

所は指示され、位置づけられたのである。光源氏との恋に思い悩んできた「女」としての立場から、すぐ続いて出てきたのが、娘前斎宮への遺言なのである。その真意は、この後語られる。女親に先立たれた娘は、心細く弱い存在だ、あなたに後見を依頼して、愛人のように扱われても、味気なく、周囲や世間から疎まれることとなるでしょう、ですから、娘を女として見ないでください、

憂き身をつみはべるにも、女は思ひのほかにてもの思ひを添ふるものになむはべりければ、いかでさるかたをもて離れて見たてまつらむと思うたまふる。（澪標五〇六）

御息所は、自身と光源氏との体験から、女の苦渋の人生をかみしめていた。「女」として、後に残る娘をその苦しみから逃れさせたかったのである。

この後、歌の贈答も語られることなく、光源氏は御息所のもとを辞した。現実には臨終の別れに際して、二人の間に詠歌はあったかもしれないが、物語としては、死に去ってゆく御息所の「女」としての叫びは、光源氏への怨みと、娘を女と見ずに後見してくれるようにと遺言する内容で、ことばとして伝えられた。歌ではその内容を凝縮させがたい、散文的なやりとりなのだ。歌は万能ではない。

七八日後、御息所は亡くなった。それに対する、光源氏の反応は、

あへなうおぼさるるに、世もいとはかなくて、もの心細くおぼされて、内裏へも参りたまはず、とかくの御ことなどおきてさせたまふ。（澪標五〇七）

と、語られる。男としての誠意をみせようと思っていたのに、あえなく他界した御息所に、光源氏はこの世の無常を思い知らされ、以後の仏事・追善を含め、現状での真心をみせる。ここには慟哭はなく、とりたてての愛執もうかがえない。光源氏にとっての御息所の今がここにある。

代わりに、母御息所の遺言を盾に、光源氏が近づいてゆくのは、娘の前斎宮だ。もちろん、御息所の意に沿って、自制するのだが。雪や霙が暗く荒れて降り乱れる日、光源氏は六条の宮邸を思いやって、消息を送った。

「ただ今の空を、いかに御覧ずらむ。

降り乱れひまなき空に亡きひとの天翔けるらむ宿ぞ悲しき」

空色の紙の、くもらはしきに書いたまへり。若き人の御目にとどまるばかり、と心してつくろひたまへる、いと目もあやなり。（澪標五〇八）

その筆遣いに、男としての光源氏が顔を出しているが、中有に漂う故人を思いやりつつの哀傷歌、ただ今の空の様子は、御息所を喪い哀しみに暮れている私たちの心のまま、の意。まばゆいばかりの光源氏の手紙に、前斎宮は返事を渋ったが、周囲に責められて、

鈍色の紙の、いとかうばしう艶なるに、墨つきなどまぎらはして、

消えがてにふるぞ悲しきかきくらしわが身それともおもほえぬ世に（澪標五〇九）

と、返してきた。霙に懸けて、母のあとを追えずにいるのが悲しく、この空のように目の前も涙に暮れて、茫然としております、の意。光源氏は、この返書を見て、「つつましげなる書きざま、いとおほどか

に、御手すぐれてはあらねど、らうたげにあてはかなる筋に」品定めした。女としての評価だ。

光源氏と遺児前斎宮との間に交わされた、愛人であり母であった御息所を悼むこの哀傷の贈答歌は、前斎宮を思いやる光源氏と、その光源氏の庇護を求めるかのように、母亡き後に遺り、弱い存在となっている娘を描き出して、この二人の今後に、既に目を向けている。御息所の「女」としての怨みは死後も消えることなく、光源氏と娘前斎宮の胸には、悔恨と母恋いの思いとともに、御息所は生き続けるが、この世での生身の御息所は、こうして去っていった。

臨終近い別れの場における贈答歌の欠落と、後に残された二人の哀傷の贈答歌が、その事を象徴的に示している。和歌は物語理解の重要な手がかりとしてある。

〔注〕

(1)源氏物語の引用は、源氏物語大成により、まま漢字を宛て、句読点を付す。漢数字は頁数。

(2)『むらさき』22、一九八五年。

(3)鈴木日出男氏『古代和歌史論』七四九頁。

(4)形の上で光源氏が捨てられることになる点については、早く円地文子氏に言及がある（『源氏物語私見』賢木の巻）。

(5)『はじめての源氏物語』七八頁。

(6)賢木巻における野宮段以降の光源氏と六条御息所との交流に関する和歌については、他に、阿部好臣氏「源氏物語の和歌―六条御息所を中心に」『解釈と鑑賞』二〇〇〇年十二月、鈴木日出男氏『源氏物語虚構論』第三編第三章「愛憐の歌」などがある。

(7)高木和子氏『女から詠む歌』第五章　描かれざる歌―源氏物語の贈答歌、を参照されたい。

(8)宗雪修三氏「『椎本』巻における和歌言語の方法」『名古屋大学国語国文学』43、一九七八年十二月、に既に指摘がある。

(9)加えて、伊勢御息所と、明石御方との間には、京を挟んで、

東海道の伊勢、伊勢の神、御息所（娘斎宮）、
山陽道の明石、住吉の神、明石御方（父入道）

という対応が見られる。

（うえの　たつよし　日本文学科）

二〇一五年十一月十六日受理